



もしも地獄が、、、その異血 (1)

ここは地獄の入り口、閻魔庁。一人の亡者がやってきた。

「あの、、、鬼のガイドに従って、やってきたんですけども、、、あなたが『エンヤ』大王？」

「ふーきゃんせいふ...」* って、コラ！ エンマだ。エ、ン、マ！」と言いながら亡者の頭をペシペシと叩くエンマ大王。（*song by Enya）

亡者が叩かれた頭を右手でさすりながら「あの、、、私はこれから、一体、、、??」と言うと、エンマ大王はそばにいる青鬼が手に持っていた『巨大なブ厚いノート』を手に取って、机の上でソレを開いて、ページを1ページ、1ページ、めくり始めた。

亡者は『あのノートに私の生前の行いが記録されているのだろうか？ どんな地獄におとされるのだろうか?』と思った。するとエンマ大王のノートをめくる手が止まった。「うん。これ。こんな物件なんてどうでしょうかね?」

亡者「は!？」 ぶ、物件!?

エンマ大王「今や当たり前、年がら年中『血で溢れている浴槽』付き、で『地獄の業火コンロ』付き。針山地獄まで徒歩3時間で、広さはなんと4畳半! どうですかね??」

なんだかワケが分からず言葉を失う亡者。

で、エンマ大王はたたみかけるように「ええとね。さらに、畜生道まで『鬼力車』を利用すれば地球時間で約1時間ですよ。どう!？」と亡者に『おしつけがましく』尋ねる。亡者はその『押し強さ』に負けて、「はあ、、、じゃあ、それでいいです。」と言った。

するとエンマ大王が満面の笑みを浮かべて「はい! けてー! お一人様、地獄の5丁目にご案内ーっ!!」と言って机の上にあったハンドベルをカラン、カラン、カランとならした。商店街の福引きで一等賞を当てたようだ。

そして、漫画『うる星や○ら』の『ラ○ちゃん』みたいな『セクシーな』鬼が出て来て、言われるがままに契約書にサインする亡者。なんだか『ファウスト』の悪魔の契約みたいだった。契約更新は地球時間で2000年ごとであった。

家賃は亡者が『各地獄での苦痛』で貯めるポイント(通称ヘルポイント)から『自動引き落とし』になっていた。その亡者の家賃は毎月『7万ポイント』であった。それを一ヶ月以上滞納した場合は、、、罰としてもう一度現世に戻されるのであった。多くはゴキブリとか、蚊とか、ミジンコとか、『シャンプーと間違われるコンディショナー』とか、になって現世に戻されるのだが、運がいいと再び人間になることができた(ルーレット方式)。しかし、再び人間になった者には『サッカー日本代表の監督』に就任するという苦痛が待っていた、、、

私の地獄での生活も地球時間で2年が過ぎた。そもそも私は『地味～な』悪事(信号無視、偶像崇拜、給食の残りを机のナカに入れっぱなし、など)が原因で地獄行きが決定したので、地獄の中でも一番明るい第一層にいる。こちらの生活にもだいぶ慣れた。ちなみに最近では地獄の許容範囲を越える亡者が地獄に落とされて来るので、鬼達が『ディグダグみたいな』かっこうをして、地獄をどんどん掘り下げてスペースを確保しているようである。エンマ大王も『個人情報管理』が大変だとボヤいているそうだ。『エンマ不動産』もいろいろ苦勞があるらしい。

地獄に落とされた亡者が各地獄（『針山』や『血の池』や『女王様がいるところ』）で苦痛に耐え、その分の『ポイント』をもらう。その『ポイント』は通貨の代わりになるし、さらにたくさん溜まると、現世か、天国かに行けるそうだ。

私の住んでいるアパートは地獄の五丁目。アパートの地下には『洗濯鬼』という鬼がいて衣類の洗濯を無料でやってくれる。良いヤツだ。たまに『放射能火炎地獄』が元気になって、その熱が部屋まで届く事があるが、そんなときは『扇風鬼』を呼んで、涼しくしてもらう。ただし、こいつは有料だ。

毎日、毎日、僕らは鉄板の、、、ではなくて各地獄での苦痛の日々なのだが、たまに『息抜き』的なイベントが行われる、『容赦のないドッチボール大会』とか。先日は天国から『あるバンド』がコンサートをしにやってきた。会場に行ってみたら、バンドのメンバーがすごかった。

ヴォーカル；フレディ・マーキュリー
ギター：ランディ・ローズ
ベース：クリフ・バートン
ドラム：コージー・パウエル
キーボード：モーツァルト

まさか、生で『フレディ』の歌声を聴けるとは思わなかった。まあ、死人の演奏に対して『生』というのもおかしな話ではあるが。天国で制作された知らない曲ばかりだったが、とりあえず、感動した。しかしキーボードのモーツァルトが演奏の途中でステージを降りてしまい、残りのメンバーだけで『クイーン名曲メドレー』を演奏した。それはそれで『嬉しいハプニング』であった。死神達もノリノリであった。何にせよ、『神格化』されたミュージシャンというのは、演奏の途中でステージを去るのが好きなようだ。

明日は久しぶりに『カワイイ動物がたくさんいるのに触っては行けない』地獄に連行される予定だ。

ここは地獄の一丁目、閻魔庁。エンマ大王は『荒れて』いた。天界からの命令でエンマ大王は地獄の第1層から第9層までの管理と、地獄に落とされる亡者の管理を任されている。いわば、中間管理職の『中の上』あたりの位置である。人間界同様、この『中間管理』という位置は上からも下からも『あーだ、こーだ』と、板挟みの状態であった。それにいろいろ、今までに無かった問題が重なっていた。

まず、天国に逝く亡者の数に対し、地獄に落とされる亡者の数が日に日に増していた。人間界では、『徳』に乏しい人間が増え続けていたのである。従って地獄ではどこかの国の刑務所のごとく飽和状態の収容施設と個人情報の管理に頭を抱えていた。最近では天国でも、地獄でも、『現世に帰ることを拒む』亡者も増えているので、その数が膨れ上がり、さらに管理が大変になっていた。天界からの命令で亡者の情報を『電子化』したのはいいが、このエンマ大王、機械に弱かった。最近になってようやく『エクセル』の表計算の設定を理解し始めいていた。その一方で以前は閻魔庁でポップ作りを主に担当していた『鬼婆』の惨怒羅（さんどら）さんがソフト、ハード、共に著しい学習能力を発揮しており、まさに『コンピューターおばあちゃん』になっていた。最近では『イラストレーター』や『フォトショップ』を巧みに操り『必要以上に凝ったポップ』を作り上げ、鬼達の間ではカリスマになっていた。エンマ大王の秘書の『ラムちゃん』みたいな鬼も『鬼婆』の趣味のパソコン教室『アビ婆』に通っていた。

そして、個人情報管理に加え『土地の管理』の問題があった。9つの層で構成される地獄界、そして各層に設けられた亡者居住区、と亡者が苦痛に耐える各『地獄（アトラクション）』。最近では亡者の数がただ増えるだけではなく、『凶悪な輩』も増えて来たので、さらなる地獄を用意するよう、天界から指令が出ていたのだが、、、工事の進行が遅れていた。

地球誕生以来、9層で構成されていた地獄であったが、第10層を作らざるをえなくなり、『ディグダグ』みたいなかっこうをした鬼達、『作業用重鬼』が地獄を掘り下げていたのだが、彼らが労働条件の向上を求め『ストライ鬼』を起こすかもしれないという情報がエンマ大王の『地獄耳』に届いていた。

第10層が完成したところで、新たな『地獄（アトラクション）』を作らなければいけないのだが、その為のアイデアも枯渇していた。

さらに、地獄の第六層以下の下層部の監督を任せている『ルシファー』も『ハデス』も、現在『お盆休みの帰省中』で、エンマ大王にとっては、『もう、どうにでもし

てくれ』という感じでもあった。

私がこの地獄での生活を始めてから地球時間で約3年が経過した。こちらの生活にもかなり慣れて来た。もっとも死者に『生活』という言葉は不適合なのかもしれないが。

この地獄は第1層から第9層までの『層状』の構造をしており、さらに最近では第10層が建設中である。長い地獄の歴史でも初めての『増築』だそうだ。罪の思い亡者ほど『下の方』に行く事になっている。『下の方』ほど『きつつい地獄（アトラクション）』が待っている。私は比較的『地味〜』な悪事が原因で地獄にやってきたので『第1層』に住んでいる。

ここでの亡者の生活は、ほぼ毎日、地球時間で約16時間、各地獄（アトラクション）に赴き、ひたすら苦痛に耐える。そして耐えた分だけ『ポイント』をもらえる。そしてその『ポイント』、通称『ヘルポイント』は通貨の様に使われ、さらに『現世』、もしくは『天国』に行く際にも必要になるものだ。当然、家賃もこの『ポイント』で支払っている。現世が『お盆』の期間に里帰りをせずに苦痛に耐えると『通常の倍』のポイントをもらえることを最近知った。

毎日、毎日、苦痛に耐える。しかし、『慣れ』というものは恐ろしいもので鬼に腕を引きちぎられようと（*ちぎられた腕は鬼の念仏でもとにもどる）、鬼に『パワーボム（*プロレス技）』でマットに叩き付けられようと、自分の過去の『思い出したくない恥ずかしい』場面を寸劇で再現されようと（*『よしもと新鬼劇』提供）、黙々と、ただ与えられた仕事をこなす会社員のような感じになってきた。

地獄で苦痛に絶えずに『ポイント』を溜めることもある。それは天界から出張でくる聖人たちの『講義』を受けることだ。先日は『弥勒菩薩』の『終末思想』の講義（全49回）を受けたのだが、やはり甘くない。まず、『弥勒菩薩』の背後からさしている『後光』。薄暗い地獄で生活している亡者の目には『きつつい』のである。そしてさらに、『弥勒菩薩』の声は通常の間人には聞き取りにくい周波数であった。さらに、『弥勒菩薩』の黒板に書く字は書道家でもない限り『読解不能』のフォントで書かれていた。それで5時間の講義の後に3時間にわたる『筆記テスト』をするのだから、かなりの精神的苦痛である。途中で居眠りをしようものなら『超苦（チョーク）』と呼ばれる『ありがたい』白い物体が飛んで来るか（命中率100%）、廊下に立たされるという古典的な罰が待っている。さらに『予定獲得ポイント』も半減だ。

なんとかテストを終えて、私が講堂を後にすると、古代ローマ風の戦車に乗

った『あの世電気』の制服を着た天使たちが閻魔庁に向かって行った。おそらく『機械に弱い』エンマ大王が『また』パソコンを『ぶっこわした』のだろう。とりあえず、私は今回のテストの結果しだいでは現世に帰る為のテスト『煉獄』に挑戦できるようである。

もしも地獄が、、、その誤 (5)

ここは地獄の一丁目、閻魔庁。機械に弱いエンマ大王がパソコンに向かって明日の亡者の予定と、それから発生する『ポイント』（*亡者に与えられるポイント。通貨の代わりにもなり、天国に昇天する際や、現世に戻る際にも必要になる）の最終チェックをしている。いや、正確に言うと『しようとして』いる。秘書のラ○ちゃん（*鬼）が、コポコポとお茶を入れている。正確に言うと『お茶のようなモノ』を入れている。

エンマ大王「あ、ラムちゃん。この『エクセル』のファイル、何かいつもとちがうんだが、、、」

秘書のラムちゃん「、、、エンマ様。これは『ワード』です。いい加減に区別できるようになってください。」

エンマ大王「あ、そう。じゃあ、こっちか。んで、新しいページはどうするんだっけ？」

○ムちゃん「ここをこうして、こうデス。」

エンマ大王「あ、そうか。思い出した。ところで、勝手に田舎に帰省していたハデスとルシファーはどうした？」

ラ○ちゃん「あ、そうでした。さっきエンマ様が仮眠をとっている間に、二人とも見えましたよ。お土産を持って。」

エンマ大王「私の『地獄耳』に気付かれないのはヤツらぐらいのもんだ。で、お土産？」

○ムちゃん「ハデスからは『ギリシャ名物、フェタまんじゅう』、ルシファーからは『イタリア名物、パルミジャーノ・レッジャーノまんじゅう』です。」

エンマ大王「そ、それは本当に『名物』なのか？」

数分後。

エンマ大王「あ、人間界の『アニメ動画』ダウンロードしてたら、画面がフリーズした。どうすんの、コレ？」

ラ○ちゃん「いい加減にしてください。」と、エンマ大王に向かって『電撃』攻撃。エンマ大王の叫び声が地獄の一丁目に響き渡った。閻魔庁の隣の『警死庁（けいしちょう）』の死神たちはこう思った。「今日も、平和だな〜。」

私がこの地獄での生活を始めてから地球時間で約4年が経過した。こちらの生活にもかなり慣れて来た。この地獄は第1層から第9層までの『層状』の構造をしており、さらに最近は第10層が建設中である。長い地獄の歴史でも初めての『増築』だそうだが、アパートの地下にいる『洗濯鬼』からの情報によると、増築工事に直接携わっている『作業用重鬼』達（*ディグダグみたいな格好をしている鬼）が労働条件の向上を求め『ストライ鬼』を起こしており、工事は中断しているという。エンマ大王に天界から『さらに圧力が』かかることだろう。その圧力は人間界の『気圧』に影響を及ぼすらしい。

罪の思い亡者ほど『下の方』に行く事になっている。『下の方』ほど『きつつい地獄（アトラクション）』が待っている。私は比較的『地味〜』な悪事が原因で地獄にやってきたので『第1層』に住んでいる。

先日、ある亡者に会った。彼は地球時間で約600年かけて『第7層』から、こつこつと『ポイント』をためて『第1層』まで昇格してきたという。生前はかなりの『ワル』だったのだろうが、現在はだいぶ改心したらしい。それだけ下層部の地獄（アトラクション）は『きつつい』のだ。彼から面白い話を聞いた。この層状の地獄の第7層以下になると、『鬼』に加えて『悪魔』が亡者を監視し、苦痛をあたえているのだそう。彼に言わせれば『鬼』というのは善でも悪でもない、『中立』の存在で、ただ単純に『上からの命令』にしたがって『亡者に罰を与えて』いるのだそう。日本の伝統美術において、自然の力が『鬼の様な姿』で表現されるのも納得できる。善でも悪でもないのだ。善悪を決めるのは人間の『損得』に由来しているのだ。ただ単に、『人間には手に負えない力』がそこに存在するだけなのだ。

で、それに対して、『悪魔』というのは善の対となる『完全なる悪』であり、下層部の亡者達は、それはもう、毎日、毎日『やになっちゃうよおう』っていうぐらいひどい生活を強いられているのだそう。なんでも悪魔は『カブトムシ』を蒸し器に入れて「これが本当のカブト蒸し!」とか言ってるぐらい『悪』なのだそう。恐ろしい、、、

地獄の一丁目の閻魔庁。そして、その隣りにあるのが独立機関『警死庁』である。この『警死庁』では666人の死神が勤務しているのだが、見た目が全員同じ『ガイコツ姿』なので本当に666人いるのかはエンマ大王にも分からない。一昔前は皆、古典的な『ボロボロのローブ』&『大きなカマ』ルックだったのだが、人間界で『デスメタル』という音楽が誕生して以来、死神達の間では『革ジャン、黒いTシャツ、ジーンズ、トゲトゲのリストバンド、、、』などが主流になったようである。でもやはり中身は『ガイコツ姿』である。本来は『実体が無い』らしいのだが、人間の意識に『死神』としてすんなり受け入れられるように『ガイコツ』なのだそうだ。

で、その死神達の仕事は何なのかというと、『生きるべきだったのに死んでしまった者』や『死ぬべきだったのに生きながらえている者』の捜査や情報管理。さらに現世の『万死に値する馬鹿』に対する『あの世への勧誘活動』、ロウソクに灯した火を『ぼんやり』眺めるなど、多岐にわたる。地獄の亡者がやがて魂の浄化を行う『煉獄』の管理・運営にも携わっている。

そして最近、彼らの仕事が増えた。『冥土カフェ』の運営である。

なんで『そんなもの』が誕生したかと言うと、地獄の下層部で『ストライ鬼』を起こしていた『作業用重鬼』達に、一刻も早く『地獄の増築工事』を完了させる為にエンマ大王が提案した苦肉の妥協策である。んで、その『冥土カフェ』は鬼だけでなく亡者も利用できるようにしたので、各利用者の『好み』に対応できるように『自由に姿を変える死神』達が運営にあたることになったのだ。しかしユニフォームだけはエンマ大王の秘書のコスプレ大好き、『ラムちゃん』みたいな鬼の独断で決められる。そして彼女の気分でコロコロ変わる。たまに彼女自身もエンマ大王の秘書をサボって『冥土カフェ』で楽しそうに働いていたりもする。鬼にも、亡者にも、大旨好評。地獄の第10層の工事も再会された。天界からの圧力に耐えるばかりのエンマ大王（カミカゼ中間管理職）の悩みの種が一つ解消。

その『冥土カフェ』の居心地の良さの噂を聞きつけた『天界』の聖人や神々が来店するのだが、彼らに対しては『かなりのボッタクリ』が行われるそうなので注意が必要だ。

地獄の一丁目、閻魔庁。エンマ大王の秘書の『〇ムちゃん』みたいな鬼（*面倒なので、もう今後は『ラ〇ちゃん』と呼ぶ事にする。）が天界からの幽便（ゆうびん）物を整理している。

「エンマ様、、、またルシファー宛に来てますけど、、、」

「またか。アイツもよく懲りないな、、、『飽きない』など言うべきか、、、」

ルシファー宛に何が天界から届いたかと言うと『試験結果』である。ルシファーはこの層状になっている地獄の第6層以下の下層部をハデスと共に管理しているのだが、、、その一方で天界での『再就職』を狙っているのであった。人間界でキリスト教がローマ帝国の国教になった4世紀あたりから、『上司』と衝突する事が増え、結局、一方的に地獄に左遷されてしまったのである。この件に関して『天界』側は『原因は音楽の方向性の違い』と発表しているが、ルシファーの先祖にあたるアンズーとアツタルが大昔、天界に『喧嘩を売った（*天界の都合の悪い事情を暴露しようとした）』ように、同じ事が繰り返されるのを防ぐ目的だったという可能性が強い。ルシファーが天界の内部事情を知る前に追放した、というわけだ。

それで地獄に文字通り『落とされた』わけであるが（*地獄に落ちたとき、アメリカの漫画みたいにルシファーの形の穴ができた。）、その後も『天界志向』の強いルシファーはしつこく『天界』に『再就職試験』を申請しているのである。本来ならば『仏の顔も三度まで』というわけで『3ストライク』で『アウト』なのだが、ルシファーは天界の人気アイドルグループ『あまつがみ（*ヴィーナス、イシュタル、アフロディテの三人組）』の『弟』ということで、『特権』が与えられているようである。が、届くのは不合格通知ばかりだ。

エンマ大王が『通知』の入った封筒を灯りにかざしてみる。

「やっぱり、また不合格だ。これ、アイツに渡すの『すっごく』気を使うんだけど、、、」

するとエンマ大王のオフィスに赤鬼が1人血相を変えてやってきた。が、もとが『赤い』ので血相がどれだけ変わっているのかよくわからない。

「エンマ様! 今回の『クモの糸登り大会』に参加する亡者のリストの最期に、ルシファーって書いてあるんですが、それも本人の筆跡で、、、」

エンマ大王と〇ムちゃんが無言で顔を見合わせる。エンマ大王、溜息をついて

「もう好きにさせたげて、、、」

第1層から第9層までの層状の構造をしている地獄。現在は地獄に落とされる亡者の急激な増加に伴い、第10層が急ピッチで建造されている。この全てをエンマ大王だけで管理するのはさすがに難しいので、第6層以下の下層部ではルシファーとハデスが監督に当たっている。天界での『再就職』を狙っているルシファーとは対照的にハデスは地下をエラク気に入っているようである。おかげで、以前、天界では『天照大神』に続いて今度は『ハデスが引きこもりになった』という噂もたった。

ちなみに、ハデスは天界のポセイドンとゼウスの兄でもある。嫁のペルセポネーとは、一応『おしどり夫婦』として通っている。ついでに言うと、彼には父のクロノスに『飲み込まれた』という苦い経験もある。そのためか、自分の経験を活かして、『人間関係に悩んでいる』亡者をみかけては、『心理カウンセリング』を行ったりしている。無料で。半強制的に。もちろん、人間の亡者の中に『父親に飲み込まれた』という者はいないので、『ありがた迷惑』な感じでもある。

趣味はミントとポプラの栽培、そして愛犬『ケルベロス』の散歩。地獄の下層部は暗いので、そのミントとポプラの栽培には、天界のヘーリオスと共同開発した『携帯型太陽：火だるまサン』を使用。『火だるまサン』は『あの世電気』で好評発売中。（携帯に便利な防火グローブ付き）

さらに彼はレスリングも好きで、彼が新しい『技』を想起しては『下層部』に居住している亡者が『餌食』になっている。したがってプロレスのリングを模した『地獄（アトラクション）』も下層部には多い。『地獄のプロレス愛好会：ヘルレイザーズ』の会長も勤めている。道楽で。エンマ大王『黙認』。

現在会員は、オシリス、ベルゼブブ（*ルシファーの秘書）、それから暇な悪魔や鬼が『出たり、入ったり』している。定期的にヘラクレス率いる『天界のプロレス愛好会：アーク』との交流戦も行っている。前回の交流戦でハデスは『ヤマトタケルノミコト』に時間無制限、一本勝負において、見事な『ジャパン・スープレックス』にやられ『黒星』を喫しており、その復讐に燃えている、、、

で、その『とばっちり』を下層部に落とされた亡者たちが『モロに』受けいでる。おかげで、生前は極悪人であった亡者達の更生も早い。

私がこの地獄にやってきてから、地獄時間で約20年が過ぎた。こちらの生活にも『かなり』慣れて、最近ではこの『層状』の構造をしている地獄の『第1層』に居住している亡者のナカでも、けっこう『古株』になってきた。一時期、深刻だった私の『冥土カフェ』依存症も克服した。が、せっかくだめた『ヘルポイント』を無駄遣いしてしまったのは痛い。

つい先ほどまで、『クモの糸登り大会』が開催されていたのだが、『ずどーん!』という『何か大きなモノ』が落下する音と共に終了した。おそらく天界での『再就職』を狙ったルシファーの重さに耐えきれずに、クモの糸が切れて、参加していた他の亡者と共に落下したのであろう。会場では今頃、『掃除鬼』が『ぐっちゃぐちゃ』になった亡者をかき集めているはずだ。ちなみに、その『クモの糸登り大会』の優勝者には『天国』への『通行証』が発行されるのだが、未だにそれを手にしたものはいない。

私はその『クモの糸登り大会』には興味が無かったので、久しぶりに『地獄（アトラクション）巡り』の無い、つまり『苦痛に耐える必要の無い』休日をのんびりとアパートで過ごしていた。

『こんこん』と私の部屋のドアをノックする音がする。また『黄泉売（よみうり）新聞』の勧誘かと思い、無視していると『警死庁』の死神が一人ドアを『すり抜けて』部屋に入って来た。『ドアに鍵がついている意味がねえじゃねえか。』と思った。まあ、ここは地獄だ。そんなもんだらう。本来実体を持たない死神は亡者の前に姿を現す時には、受け入れられやすいように『ガイコツの姿』をとる。そしてコイツは『IRON MAIDEN』のTシャツを着ていた。手首には『トゲトゲ』のリストバンドだ。メタルなやつだ。

死神によると、『警死庁』の長年の調査の結果、どうやら私は『生きるべきだったのに死んでしまった』らしい。まあ、今さら『なんだかなあ』という話ではある。死神は半ば呆れて話を聞いている私に『特霊（とくれい）』として3つの『選択死（せんたくし）』を提示。

1つは充分な『ヘルポイント』を溜めた亡者同様、『煉獄』を通過して『天国』へ行く。2つ目は、『煉獄』を通過して現世に戻り再び生きる。3つ目は、時間を遡り、私が死ぬ5分前から『やり直す』。

死してもなお『優柔不断』な私が『うーん』と悩んでいると、死神はシビレを切らしたらしく、トランプのようなカードを3枚取り出し、床に伏せておいて、「

もう、この中から1枚選べ。」と言った。結果、私は『煉獄』を通過して、『現世』に戻る事になった。まあ、何にせよ住み慣れたとはいえ、『毎日地獄の苦痛』に耐えるよりはマシである。

アパートの地下の『洗濯鬼』に別れを告げ、外に出ると『貧乏神』の運転する『火の車』が止まっていた。タクシーのような乗り物であるが、初乗り料金でかなりの『ヘルポイント』を取られるので、使用する亡者はまずいない。私も乗るのは始めてだ。『貧乏神』は寝違えた痛みで『首が回らない』と、『ややこしい事』を言った

貧乏神の運転する『火の車』の後部座席で揺られながら窓の外の景色をぼんやりと眺める。眺めながら、これまでの地獄での苦痛に耐える日々を振り返る、、、あまり振り返りたくない。特に『よしもと新鬼劇』による私の人生、最大の汚点の出来事を『再現した演劇』は思い出したくない。だが、私の『初恋』にまつわる出来事を『劇団死鬼』が『無駄に感動的』に再現したのは良かった。脚本を手がけているのは天界のディオニュソスと『元人間のニーチェ』だったそうだ。ニーチェの崩壊した精神は『こっちの世界』で正気を取り戻したようだ。

地獄の第一層の最北端の地に到着。火の車から降りて、煉獄の入り口に立ち、その巨大な塔の様な建造物を見上げる。古代ローマの闘技場をそのまま高層建築にしたような建物だ。最上部は黒い雲に隠れて見えない。正面入り口のとなりには『正教会派』や『プロテスタント派』の亡者用の入り口があった。そういえば、彼らの教義では煉獄の存在を認めていないと聞いた事がある。同じ『神』を信じていながら、よくもまあ、教義および宗派がここまで枝分かれしたものだ。それで、お互いにお互いの正当性を主張し合っているのだから、まあ、おかしい話ではある、、、と人間の業を皮肉っているうちに煉獄の受付カウンターに到着。

カウンターにはベアトリーチェと名乗る若い女性がいた。

「えーっと、あなたは、、、手元の資料によると『カトリック』ではないですね（*『ちっ』、と軽く舌打ちをしやがった）、、、、それでは、、、この用紙にサインを。はい。それではあの矢印に従って進んでください。」

と、言われるがままに矢印に向かって進む。途中、ダンテと名乗る男が『カトリック』への勧誘をしていたが無視した。大きな銀の扉の前にたどり着くと、音声ガイダンスが流れた。『これから魂の浄化を始めます。魂の浄化にともない、これまでの記憶はすべて消され、再び現世での生活を送る準備を整えます、、、』

私は一瞬、躊躇した。これまでの記憶が消される、、、

振り返ってみれば『ロクでもない』人生と『地獄での日々』だったが、それでも何回かは『自分が幸運に思える出来事』があった、、、その記憶が消える。今までに無い『孤独感』に襲われた。が、私は何度も、何度も、コレを繰り返しているのかもしれない。そう思ったら楽になった。楽になったので銀の扉を開けた。

私の後方で扉が閉まると、何処からともなく聞き覚えのある音楽が、、、

『全日本プロレス中継』のテーマだ。

再び音声ガイダンスが。しかもノリノリの音声だ。ガイダンスによると、私

はこれから7階まで上って行く事になるのだが、各階にいる『猛者』を『倒して行かねばならない』そうだ、、、聞いてねーよ。なお、もしこの『猛者』に敗れた場合、強制的にカトリックに洗脳されて現世に送られるか、人間以外の生物として現世に戻ることになるそうだ。あのな、、、

『さー、炎の七番勝負、第一回戦。時間無制限、一本勝負を行います! すきな武器をお選びください。では、コミッションナーのスサノオノミコトの挨拶です、、、』

もう、どうにでもなれ。

『スタン・ハ○セン』と同じ入場曲にのって、身の丈2m☒の『酒呑童子』が姿を現した。

もしも地獄が、、、その獣煮（12）

ここは地獄の一丁目、閻魔庁。今日も新人亡者がやって来た。若い男性だ。

「あの、鬼みたいなヤツにココに来るように言われたんすけど、、、アンタがエンマ大王っすか？ あ、ここ座ってもいいっすか？ 何かダルいんすよねー。」

エンマ大王は無視して、地獄の構造について説明して、地獄の第3層の亡者居住区のアパートの物件を2、3、件紹介する。若い男の亡者は

「地獄って、ちょーマジ、ヤバくないっすか？ 今どきありえなくね？」

その横柄な態度に『ぷちっ』と『何かが切れた』エンマ大王。気が変わって『職権乱用』モードに。その亡者を最近完成した地獄の第10層へ『強制連行』することにした。この層状の構造をしている地獄の一番下。最も過酷な地獄（アトラクション）が、待ち受ける場所である。従来は9層までしか無かったが、ここ最近では地獄へ落とされる亡者の数があまりにも増えたので、第10層を増築したのであった。

一方、それに反比例して天国は暇になってきたようで、天使の何人かがリストラされて、人間として現世に送られる事になった。現世で生きる事は天使にとって『死刑』に等しい。同時に、天界では『天国逝き』の基準を『緩和すべき』との声も上がっているようだ。

エンマ大王が溜息をつきながら鬼に引きずられて行く亡者を見届ける。『秘書』の〇ムちゃん（鬼）が『お茶のようなもの』をお盆にのせてやってきた。

「オシリスさんが目を覚ましたみたいです。」

「げ。あのジジイが起きたか。」

100年に一度ぐらいのペースで目を覚ますこの『オシリスさん』は地獄の閻魔庁において、エンマ大王のアドヴァイザーというか、特別顧問というか、、、まあ、『口うるさい年寄り』の位置である。しかも、天界のホルスの父親でもあるので、天界とは未だに『強いコネ』を持ち、『中間管理職』のエンマ大王にとっては少々、タチの悪い存在である。うわさをすれば、、、というわけで、杖をついたオシリスさんがヨロヨロとエンマ大王のオフィスに入って来た。

「ああああ、、、『ラ〇ちゃん』さん、、、飯はまだかい？」

「ついさっき食べたばかりじゃないですか。」

「ああああ、、、そうだっけ、、、おい、エンマ。お前、最近また天女たちに『ちょっかい』を出したそうだがああ、、、いくら『万年独身』のお前でもおお、、、」

「ほっとけ。くそじじい。」と、エンマ大王が言うとオシリスさんは『バタリ』と顔面から床に倒れた。それを見てエンマ大王が〇ムちゃんに「Good job.」と言って親指を立てて見せた。『お茶のようなモノ』に入れた睡眠薬が効いてきたようだ。これでまたオシリスさんはまた100年ぐらいは目を覚まさないだろう。

しばらくすると、ラ〇ちゃんは今度は『日本の神社の巫女さん』の衣装を身につけて

「じゃあ、行ってきます。戻ったらスグに連絡しますので。」と言って、スーツケースを引きずりながら、閻魔庁の外に停車している『天界の戦車』に乗りこんで天界へ出張。何故かと言うと、天照大神がまた『引きこもって』しまったので、引きずりだすために天岩戸（あまのいわと）の前でニーケや、アメノウズメと一緒に『セクシーダンス』を踊らなければいけないのであった。

「やれやれ、、、」溜息をつきながらエンマ大王は再び、眼鏡をかけて、今日面会する亡者のリストと『おススメ物件』リストに目を通す。